

劔岳 長次郎谷右俣・八ツ峰上半部～アルパイン～

【報告者】O田(想山会)、A屋、T・K、I藤

【日時】2017年8月11日～14日 【天候】晴れ時々雨

【参加者】A屋CL、T・KSL、I藤(食当)、O田(記録)

《 全体行程報告：O田 》

8月11日(BCアプローチ)

立山駅駐車場 9:45 - 立山駅 9:55 / 10:10 - 10:18 美女平- 室堂 11:38 - 雷鳥沢キャンプ場 12:20 - 劔御前小屋 14:20 / 14:33 - 劔沢キャンプ場 15:00

北陸道を降りて立山駅へ向かうとすでに駐車場は既にいっぱい。我々は川を渡った先の臨時駐車場へ案内される。共同装備を振り分け、ケーブルカーとバスを乗り継いで室堂へ。福岡出発の際には終日雨予報が出ていたが、曇りがちではあるものの晴れ間も多く見える。「山の日」イベント開催もあって室堂は大賑わい。雷鳥坂の辛い登りを越え劔御前小屋を越えて劔沢キャンプ場へ。彩鮮やかなテントでいっぱいだ。なんとか雨が落ちる前にテント設営まで終わることができてほっとする。

劔沢の警備隊派出所に雪溪の状態など情報を仕入れにいくが、まだ入山者が少なく期待したほど最新情報は得られなかった。明日の天気予報も良くはない。さてどうしよう？それはさておき、初日の食事はしっかり美味しいものを。富山のスーパーで買い込んだ共同食を調理してみんなで囲む。お腹が満たされると行程打ち合わせ。明後日の天気は良さそうだ。「明後日は八峰



上半に行きたい」T・Kさんから迷いのない言葉が出る。だったら明日は天候の不安を抱えつつ源次郎尾根を無理するより五峰・六峰間コルへの取り付きの様子など見ておいた方がいい。雪訓なら雨でもできると全員一致で就寝。

8月12日(長次郎谷左俣)

起床 3:30-劔沢キャンプ場 5:05 - 劔沢雪溪入溪 5:45 - 平蔵谷出合 6:00 - 長次郎谷出合 6:30 - 熊の岩 8:35 / 8:52 - 長次郎のコル 10:30- 劔岳本峰頂上 11:00 / 11:27 - 劔山荘 11:15 - 劔沢小屋 14:40 / 14:55 - 劔沢キャンプ場 15:10

雨は降っていない。本峰登れそう！とワクワクする心とは裏腹にお腹を下してしまった。念のためと持参したストッパでなんとかなるも、思ったように力が入っていないらしい。雪溪の登りではA屋さんに「なんだかふわふわ歩いているように見えるけど大丈夫ですか？」と言われて漸くそうかもしれないと思うほど、自分の身体の状態があまり良くわかっていなかった。

熊の岩を通過して雪溪の傾斜がどんどん強くなる。シュルンドやぱっくり口を開けたクレバスに気を遣いはしたものの、体調も回復してきたこともあって楽しく登れるようになって来た。長次郎のコルに到着するとそこには花が咲いていて癒される。日当たりがいいのか、劔沢までの道中あちこちで標高が低いにも関わらずまだ咲き誇っていたチングルマがここではすっかり綿毛になっていた。

北方稜線の岩陵を進む。本峰に到着するも辺り真っ白け。残念ではあるけれど、それでも劔の頂上に立っている。「今回の山行はピークには拘らないです」って言うてはいたものの、やっぱり立ってみると嬉しいものだ。

翌日は時間・体力を考慮し、八つ峰上半後、長次郎谷右俣を下降する案が最有力となったが、リーダーは長次郎谷右俣が安全に下降できるかまだ不安視している様子。誰かしら右俣の状況を知る人はいないのか？テント場に遅く帰ってこられたギアをつけたパーティーにたずねてまわって見たものの、右俣の状況を知る人には出会えなかった。



8月13日（八ツ峰上半部縦走）

起床 2:00・劔沢キャンプ場 3:23・劔沢雪溪入溪 4:33・長次郎谷出合 4:50・五峰・六峰間コル 7:18・八峰ピーク 11:45・池の谷乗越 13:30 / 13:55・長次郎谷出合 16:00・劔沢雪溪入溪地点 17:10・劔沢小屋 17:45・劔沢キャンプ場 18:00

天気は良く予定通りいよいよ八峰上半縦走へ。昨日より1時間半も早い出発にもかかわらず、雪溪まで下ると既に数パーティーがアイゼンを取り付けている。

5・6のコルが見えて来たところで、はるか上部から「ラック！」と上部から大声が上がる。見上げると前方パーティーが大きな落石を起こしてしまっていた。幸い掛け声が素早く大きく、落ちて着いて観察して避けることができた。大岩は長次郎谷の下

方に転がり落ちていった。あんなに大きな落石に当たってしまったら。。恐ろしい。さて、5・6のコルを前にしてT・Kさんのお腹の調子がよくないらしい。A屋さんも体調が良くないとの事。それでも天候的には申し分なくこの上ないコンディションであるため八峰縦走を継続するものの、Aさんはコルを手前で「力が入らない」と引き返されることになった。計画に始まり事前トレーニングから面倒を見てくださったリーダーの不在は残念だったが致し方ない。

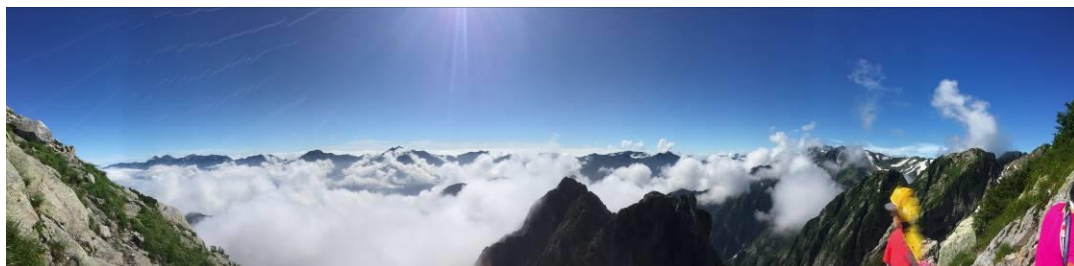
六峰の登り最初の2ピッチはスタカット。1ピッチ目はT・Kさんリード、中間のO田はフィックス貼ってもらってアッセンダーを使って登る。ラストI藤さん。2ピッチ目はO田がリードをさせてもらうもビレイ点を見落とし(ハイ松でとるものだったらしい)登りすぎてしまう。登りすぎている事にさえ気づいていなければ、「残り3m」というコールも聞こえない。T・Kさんが「半分くらい残っていたら中間8の字で登るから」と事前におっしゃっていたのを鵜呑みにしてしまっただけで臨機応変に対応できず、ようやくピナクルに見当をつけて



ピッチを切る。その後はコンテで進む。浮石が多く緊張しつつも快適な岩陵歩きを楽しむ。時短のために七峰ピークを巻いたこともあって、あっという間に八峰ピーク。と感じたけれど、それまでのアプローチが長かっただけに錯覚で、実際は結構な時間を要している。八峰の頭への登りは足元が不安定でセルフビレイを取れそうなピナクルも見当たらない中でどうにかこうにかと言った場所を探してT・Kさんのビレイをした。これがこの山行で一番緊張した。八峰の頭からの懸垂下降は2回に分けて降りた。2本のロープを用いて一回で降りるには降りるべき場所が下降点の直下からそれすぎていてやめて置いた方が良さそうだった。此处でやっとT・Kさんのロープの出番となったが、急がなければ上半縦走だけなら軽量化を優先してロープ1本にするのもありだ。

池の谷乗越に到着して残すは降りるだけ！とすっかりやり遂げた気分になっていたが、気が遠くなるほど単調な長い長い長次郎谷のくだりの始まりに過ぎない。熊の岩まではコンテで降った。3名でのコンテでは常にロープが張った状態で歩くことに苦勞

した。熊の岩付近でコンテを解いてからは、歩きの速度の違いで距離が開いてしまう。雪渓とは言え、ガスが立ち込めるとお互いの位置が確認できなくなりルートを誤ることもあるので注意が必要。剣沢の長い登り返しを終え、ようやく剣沢小屋に戻り、リーダーと合流。朝から持っていた天気は、食事をする頃には降り出した。



8月14日（下山）

剣沢キャンプ場 5:30 - 室堂/9:40 - 立山駅・森の風立山（入浴・昼食） - 立山博物館・北陸道・舞鶴若狭道・播但道・山陽道・九州道・帰宅

帰りも熟れたブルーベリーには出会えずじまい。今年が特別寒いからではなく、そもそも時期じゃないのでは～？

《 個別感想 》

（A屋）

今回の企画ではメンバーの登攀技術では問題ないだろうという判断をしていたが、気象条件や雪渓の状態については最後まで心配が残った。夏山特有の変わりやすい天候を踏まえ、剣沢撤退も覚悟しつつ入山した。雪渓は残雪が多く状態が芳しくないことは記録でわかっていたが、剣沢でも最新の状況がつかめず判断に苦労した。

2日目は、雨天でも長次郎谷の雪渓の様子を偵察するという方針にした。偵察の結果、源次郎尾根は問題なく登れそうだが、6時の時点で40人くらいの行列がとりつきに発生していた。I・II峰間ルンゼは雪渓が多く残りかなり悪い。ルンゼへ渡るスノーブリッジは崩落寸前だし、ルンゼ内は氷塊に塞がれ、沢といえるほどの水が出ていた。一方、V・VIのコルには雪渓が上部まであるものの、右岸に雪渓の切れ目があり落石に注意すればアプローチできそうだった。偵察を終え、まだ雨は降っていたが空は明るく風も穏やかなためそのまま長次郎谷の左俣をつめ剣本峰経由で帰ることにした。左俣にはシュルンドが幾重にも開いており、右へ左へ弱点を求めてルーファイしながら詰めていった。九州ではできないアイゼンワークのちょうどよい練習になったのではないかと思う。稜線上の雷雨も懸念していたが、予報に反して雨は収まり涼しくて快適な天候だった。

3日目は、時間・体力の面から八ツ峰上半部から右俣下降のルートを選択。個人的には、この右俣の雪渓を安全に下降できるかが最後まで気がかりだった。不覚ながら自分はこの日、体に全く力が入らず、岩を掴んで自分自身の体を引き上げることができないほどだったのでV・VIのコルの手前で自分だけ引き返すことを決断。天気は快晴で撤退理由は無かったので、リーダーを T・Kさんに託し、剣沢でメンバーの帰着を待つことにした。無事に八ツ峰上半部を成し遂げられたようで本当に良かった。

個人的な反省はやはり体調管理。食欲が減退する中で2日目のカロリー摂取量が圧倒的に少なかったことが3日目のシャリバテとして表れたのではと推定している。また、お盆休みの劔岳の入山者の多さは想像以上だった。バリエーションルートでは取りつきのまでの競争は熾烈であるし渋滞や落石も多いようだ。人為的な落石に当たるリスクを受け入れられる人のみが入山すべき状況にあったと思う。

(O 田)

劔エリアに立ち入ったこともないのにいきなりバリエーションルートに挑む機会をいただいた。何故かいつだって出かけるまでは変な自信があって、良くも悪くも躊躇うということを知らない。A屋さんからご案内をいただいて即挙手した時にはまだまだ時間があるように感じていたけれど、2回の野北海岸での合同トレーニングと2回の個人歩荷トレしかできないまま、初めての劔！に「ワクワク」している間にひと月半はあっという間に過ぎ去ってしまった。

前述の通り気持ちだけは胸に溢れるほどあっても、結果的にはまだまだ。。まずは歩く力から出直しかなあ。と。不完全燃焼感残るけど、劔本峰登れて満足。行程が長くゆっくりしてられない山行で早く歩けなかった私に辛抱強くお心遣いと励ましをたくさんいただき、本当にありがとうございました。ご一緒させていただき感謝です！

(I 藤)

通称 点の記ルートにおいて、二日目に劔岳を登頂した後、私は、前劔の付近の一般ルートを下山途中、正規のルートを見間違い、まさかのスリップをしてしまいました。たちまち石は崩壊し、顔面大の石が3個程ゴロゴロと谷底に落ちて行きました。おそらく東尾根方面だったと思われます。正規ルートから登って来る登山者から「気をつけてよ」と注意を受け、「ごめんなさい」と謝罪し（声が小さかったかも）幸いなことに石は誰にも直撃せず済みました。また、数分経過した後も、下から騒然とする気配などが聞こえてくることはありませんでした。劔山荘に到着しましたが、多くの客で賑わっていました。劔沢小屋にも到着しましたが、同じ様子でしたので、そのすぐそばの派出所に負傷者はいないか尋ねてみたところ、「今のところ通報はない」とのこ

とで、一先ず安心していました。

まさかのスリップで落石をしてしまったことを内省しつつ過ごしました。その日の晩は、一安心はしておりましたが、気持ちはすっかり消沈し、翌日の八ツ峰の縦走について緊張感や不安が高まったまま、就寝しました。

翌朝の私の体調は疲労感も残りつつ、まずまずといった具合でした。長次郎谷の雪渓を登っている最中、五・六の科尔手前で「ラク、ラク」と遠くから何度も繰り返す声が響いてきました。ゴロゴロした巨石が下り坂を加速しながら転がってきました。すぐさまA屋リーダーから岩陰に身を隠すように、指示がありました。凄まじいスピードと勢いで、横を通過していきました。目撃者の皆はきっと、当たれば死ぬな・・・とヒヤヒヤしました。と同時にメンバーの身体も、好調ではない様子でしたので、私の気持ちは、進退窮まってしまいました。その後の行程についてメンバーと再確認しましたが、予定通り決行することになりました。前述の通り、リーダーが不在なのは残念ですが、体調を最優先することは（自身の安全を確保）とても重要なことになってきます。万が一の際、野外でのレスキューには限界があり、私たちは厳しい自然環境に曝されている状況下であることを忘れてはいけません。

そんなこんなで、恐怖心が拭えず消極的となってしまった私は、三日目はT・KさんとO田さんに甘えさせて頂きました。石を落さないよう、静荷重を意識し、岩にはゆっくり体を乗せることに集中しました。八峰を中間のコンテで登攀中には、中高年男性が真下からフリーで登って来たので、「石が当たるので真下に来ないで下さい」と注意喚起をしましたが、聞こえているのかいないのか、何も返答はなく、私を追い抜いて行きました。また、八峰の頭からの懸垂下降途中に、後続のパーティーから「ラク」という声の数秒後に、私の右肩スレスレに落石が飛来してきました。私自身が気にしすぎているところもありますが、後続パーティーはその後素知らぬ素振りで、全く動じる様子でした。

まとめとして、劔岳の様に浮石の多いところで登山をする上で、落石があることは予見できる（想定しなければいけない）リスクと考えられ、覚悟の上で登山をしているということを認識しなければならないと思います。当然、落石を起こしていいわけではなく、細心の注意を払って自分が被害者にも加害者にもならないよう、十分に気をつけないといけません。

二日目の大きなシュルンドをタガーポジションで歩くことに怖さを感じ、A屋さんから速やかにロープ確保して頂いたこと、また、三日目のT・Kさんは、上半部全体をほぼリードで登攀し、安全を最後まで考慮して頂いたこと、O田さんは、リードや懸垂下降を積極的に度胸ある行動をされたことなど、皆さんにフォローをして頂き、とても感慨深く感じます。今後また、八ツ峰に再チャレンジすることがあれば、私も

リードとしての登攀が出来るように、技術や体力、精神力を高めていきたいと思いません。どうもありがとうございました！

(T・K)

雪溪の残るアルプスのバリエーションルート。劔岳源次郎尾根、八つ峰というメジャールートとはいえ体力、技術、判断力が試される山行のため、ボッカやロープワークのトレーニングをいくら実施しても、不安と期待が入り混じった気持ちは落ち着くことがなく劔沢に到着。さらに読みにくい天候で現地についても予定がたたず、なかなか判断が難しい山行であったが、源次郎尾根、八つ峰に囲まれた長次郎谷に立った時これまでの辛さも吹き飛ばすほど感動した。

3日目の八つ峰は急きょリーダーを任せられ、リードで登る場面が多かったが、フィックス、スタカット、コンテの使い分けはもう少しスムーズにできたかなと思う。スタカットの場面はコンテで、コンテの場面は各自フリーなどなど。安全とスピードの優先度についての判断は難しいが、バリエーションの経験値を上げてより安全でスピーディな行動ができるようになりたい。

またアルパインはチームで行動し、判断し、達成することで個人では味わえない感動があるように思う。今回の山行も色々困難もあったが、メンバーと無事山行を終えたことに感謝したい。